

牧口常三郎新資料紹介（1）

1. 窪田正隆宛葉書

（表面）

「豊島区池袋一丁目五一五

窪田正隆様

東京市豊島区目白町二丁目一六六六番地

牧口常三郎

三月三日

」

（裏面）

「拝復 懸る遠路御立寄り被下候処不在にて失礼

謝上候 友あり遠方より来る又楽しからずやとは今の境

涯ひ通切の詞に候 但し例によって話はいつも信仰の事

にとか 之は品物よりは金銭が、小利よりは大益が、それよりも

金銭等の小利益を創造する生活法が、その小法よりは大法

が、枝葉よりは根本が、部分的よりは全体的が等と、

次第に高次の原則へと要求した結果、到達したものに

有之、一たん最大の生活法に到達した以上は次善三善等の

法の下級を与ふるは慳貪に墮するとの仏説に謂はざれば

法罰がてき面なる代りに之に反対するものも同様に当るべし

その教えに御届とて早く安全地帯に共同生活を希望する義に候

御ひまもならずいつでも歓迎に候 御一報の上御決連絡上存候也 』

（翻刻 神立孝一）

解 説

この葉書は、消印⁽¹⁾から、昭和15（1940）年3月3日に書かれたもので、牧口常三郎が、西町小学校、白金小学校校長の時の訓導であった窪田正隆⁽²⁾に対して、大善生活の実践（信仰）を勧める文面となっている。

窪田は、鹿児島県出身で、大正9年春⁽³⁾から西町小学校で、その後、大正12年4月から昭和2年9月頃まで白金小学校⁽⁴⁾で訓導を勤めていた。その後、鹿児島県立末吉高等女学校の教諭等を経て、昭和14年から昭和17年まで旧制福井中学校に勤務している。

昭和15年春、上京の折りに牧口宅を訪ねたのであろう。この頃、窪田は教育者として牧口を深く尊敬していたが、信仰を共にするには至っていなかった。牧口は、窪田に対して、「但し例によって話はいつも信仰の事にとか」とあるように、会うごとに信仰の話をしていただと思われ

る。

次に、この葉書の中心部分の「之は品物より金銭が、・・・同様に当るべし。」の文面には、創価教育学体系以降、更に深みを増していく牧口の「価値論」の基本原理がわかりやすく凝縮して述べられている。「・・・到達したものに有之」までの前半は、「真理の認識」に、また、「・・・同様にあたるべし」までの後半は、自他ともに幸福を目指して、仏法を根本とした大善生活法を他者にも勧めていく「価値の創造」に相当するのではないだろうか。しかも、このハガキは、牧口の「価値論」の最高峰にたどりつこうとしている時期に書かれたことから「法罰」⁽⁵⁾についても述べられている。

最後の部分では、安全地帯で共同生活を送ろう（一緒に信仰をしていこう）と呼びかけ、「何時でも来て下さい。お待ちしております。」と結んでいる。

- (1) 葉書には、次のような昭和15年4月3日正午から午後4時の小石川郵便局の消印が押されている。
（「昭和十年十一月十五日通信省告示第二千九百六十四号」『日本の郵便消印』、蒐集時代社、昭和36年）56頁、および『日本切手百科事典』（日本郵趣協会、昭和49年）496頁－501頁参照。なぜ、3月3日にかかれたハガキが、4月3日付の消印となっているのかは今後の課題である。



- (2) 『牧口常三郎』（聖教新聞社、昭和48年）443頁－445頁、『牧口先生の思い出』（聖教新聞社九州総支局、昭和51年）5頁－30頁等に手記が掲載されている。窪田は、昭和33年に創価学会に入会。昭和51年『創価教育学入門』（東京精文館、昭和51年）を著している。
- (3) 窪田正隆の自筆履歴書によれば、「大正九年五月二十七日 東京市西町尋常小学校訓導拜命（七級下俸）」とある。前掲2書によれば、2月初めに西町小学校を訪問、採用決定の1ヵ月後に代用教員の辞令が来たが、訪問翌日からそれまで、牧口の手伝いをしていたとの事である。窪田の大正9年2月3日付の弟敏夫宛の手紙に「僕も二三の学校から来てくれと云ふ事であったが私のために最も親切にして下された有名な地理学者で人格の高い牧口と云ふ校長の下に働く事になって未だ正式に辞令には接しないのであるが二月二日から東京市下谷区西町小学校へ通勤して居るけれども手紙や葉書等は未だ此処にはやるな」と書いている。文面から、正式に採用される前の2月2日から牧口のもとで働いていることがわかる。
- (4) 前出窪田履歴書には、「大正十二年四月二十七日 東京市白金尋常小学校訓導拜命（六級下俸）」とある。
- (5) 「法罰」についてはじめて体系的に論じたのは、『創価教育法の科学的超宗教的実験証明』（昭和12年9月）の第7章「宗教研究法の革新と家庭国家の宗教革命」第3節「法罰観」（牧口常三郎全集第8巻、第三文明社）79頁－85頁。その後、創価教育学会機関誌『価値創造』の最終号である第9号（昭和17年5月）に「法罰論」（前掲牧口全集第10巻43頁－49頁）として、上述の論述がほとんどそのまま再掲されている。

ちなみに、『価値創造』第6号（昭和17年2月）と同第7号（昭和17年3月）に掲載された「価値判定の標準」（前掲牧口全集第10巻28頁－39頁）と前掲「法罰論」との両者が著されることにより「価値論」は、最高峰に到達したと推察することも可能である。

以上、価値論についてのコメントは、古川教氏と検討した結果である。

（塩原将行）

2. 本間紀一宛葉書

(表面)

「札幌市南六西十七

本間紀一様

東京豊島区目白町二ノ一、六六六

牧口 常三郎 』

(裏面)

「 拝復 史上未曾有の国難に直面してゐるとは
いひ鮮緑遍身の候、アカシアの花咲きし札幌の■
■ 往年の回想無量の感激に御座候。宜しく
■ ■ 栄東大賀なし。国家も家庭も一身も生命の
御恵を得んとするに表る外は無之。幸にも唯物観
よりは皇国に生れし有りがたさは共々享受しつゝも心の
安住、生活力の源泉にあこがれる事は御同様と存し候。
然らば老生最近の状態は別冊にて御察し被下候ハゞ、
■ ■ 対岸の火事黙すべきにあらず、等しく御同感
の■ と存し候へは好縁によって御一考被下候ハゞ幸ひにも、
■ ■ ■ 性に対し不旬報如此に御座候 六月十九日 』

(翻刻 神立孝一、開沼正)

解 説

葉書の表面の消印は、昭和18年6月19日である。また、表面に赤鉛筆で、「18-6-22」と書いてあり、本間紀一は6月22日に受取った。さらに、赤鉛筆で、「(牧口先生絶筆)」と書いてある。本間は、このハガキが牧口の絶筆と思っていた。事実、現存する書簡葉書の中で、獄中書簡を除けば最晩年のものである。

ハガキ裏面は、本文上部を糊で、『人生地理学』の裏の見返頁に貼付されていた為、判読不可な部分(■で表記)がある。

消印の昭和18年6月19日は、牧口が静岡県賀茂郡浜崎村須崎(現下田市須崎)で逮捕される同年7月6日の17日前である。この年牧口は、二度警視庁に出頭を命じられ神社礼拝問題について取調べを受けており、また、6月には、中野署に1週間留置され、同様の取調べを受けている。治安当局の動きは十分牧口も察知していた。また、6月に入り、神札を祀る件で、大石寺に緊急に呼ばれ登山しており、6月28日には、法主日恭に対して直諫をしている。日本軍は、昭和18年2月1日にガダルカナル島撤退開始、5月29日にはアッツ島玉砕している。昭和18年に入り太平洋戦争の戦況は厳しさが増し、国家も創価教育学会も極めて緊迫した状況に置かれていた。

(1) 本間紀一について

本間紀一は、明治21年2月11日、札幌に生れている。31歳、大正7年に樺太大泊に移住、そ

ここで結婚し、また、キリスト教徒になっている。大正15年に、樺太の郵便局を退職して札幌へ、その後、鉄道通信区で昭和2年から昭和20年まで勤めている。その間、昭和2年から昭和15年まで野付牛（現：北見市）に単身赴任している。昭和20年に定年退職の後は、2、3年して盲学校の事務を昭和31年まで勤めている。昭和39年11月には、吹雪の中も郵便配達をする郵便局員を励ます激励文を書く運動を推進しているとして北海タイムス11月17日付で、緑のおじいさんとして、同紙昭和41年5月5日付で紹介されている。昭和45年1月29日逝去。札幌豊平教会で葬儀式。なお、紀一の母本間ミテは、慶応元年に小樽市永井町に出生。ミテの父は新潟県佐渡郡に出生、元治元年に故郷を後にしている⁽¹⁾。

葉書の中で牧口は、本間との共通の思い出である往年の札幌を回想している。そして、史上未曾有の国難に直面する中で、信仰の対象の違いはあるとはいえ、その共通の部分に経って、「対岸の火事黙すべきにあらず」と述べている。

（2）発見の経緯と本間所持の『人生地理学』の書き込み

牧口と本間との関係を考察する上で、この葉書がどのようにして発見されたか述べておきたい。昭和40年5月頃、本間紀一の近所に住む創価学会員、広川金治夫妻が、本間が牧口常三郎に縁があることを知り訪問、その時に、本間は、「私は、（創価学会の）信仰をしておりますが、（牧口先生は）大切な友人です。必ず何かをなされる方であると思っていました。」と語り、この葉書を託したというのである。

次に本間宛の葉書が貼付されていた『人生地理学』も、別の経緯で、本間紀一から寄贈された。ハガキ寄贈の後と思われるが、札幌市宮の森で開催された創価学会の座談会で浅香毅勲氏が牧口常三郎の話をしたところ、偶然出席していた本間紀一が、「牧口先生の話に感銘しました。うれしい。私は牧口先生にお世話になったのです。牧口先生の『人生地理学』を持っていますが差し上げます。」と述べ、翌日、浅香の元に届けたというのである。本の見返にある「41.6.4」は、時期的に考えて、浅香に届けた日にちの可能性が高い。

本間が所持していた『人生地理学』には、多くの書き込みがあり、本間と牧口との深い関係を示している。以下、列記する。

見 返 昭和四十一年二月十二日

御寄贈セシ札幌市宮の森小学校ヨリ

私ノ牧口常三郎先生ヲ“尊敬スル御著書”

ノ故を以テ之レヲ拝受ス 為念書キ置キマス。

札幌市琴似町東八軒五二二

七十八翁 本間紀一

* 中央に、本間の認印（後で述べる橋文七所蔵の『人生地理学 前編』と同じ印）

* 鉛筆でページ全体に×印をしてあり、下に、「41-6-4」と鉛筆書きがある。

標 題 紙 宮の森小学校図書館の「36. 5. 4」と入った寄贈受入スタンプ印、本間氏寄贈のスタンプ印

遊 紙 敬憶

牧口先生

昭和三十二年二月 橋文七

* 敬憶の斜め右上に赤鉛筆で二重マル。本間紀一によるものか。

- 例言最終頁 「著者識す」の左横
札幌師範学校 一部第七回 明治二十六年三月御卒業
(旧渡辺) 牧口常三郎先生
- 口 絵 紫のスタンプで、「札幌市北四条西十一丁目」左横に「本間紀一」
奥 付 本間氏所蔵の『人生地理学』は、明治36年10月15日第一版発行の
明治36年10月25日の増刷版
紫のスタンプで、「昭和13年8月22日」とある。
- 裏表紙 札幌市の「富貴堂」を赤鉛筆で塗ってある。
遊 紙 北海道新聞昭和31年10月10日付『価値論』の広告を貼付。
左横に、「牧口常三郎先生が獄中に逝いて既に十年
来る十一月十八日をもって十周年を迎えることになった……
昭和二十八年八月
創価学会々長 戸田城聖
『価値論』の序文の一節を写す」とある。
更にその下に、書いた日と思われる「33-6-28」の日付がある。
- 見 返 明治33年2月発行の『北海道教育雑誌』に掲載された牧口の写真を貼付

以上の書き込み等から、以下のことがわかる。

1. 昭和36年に本間氏から宮の森小学校に寄贈され、昭和41年に本間に返却された。
2. 昭和32年2月に橘文七氏の書き込みがあることから、この頃、橘と共に牧口を偲んだ。
3. 人生地理学を入手したのは、スタンプ印から昭和13年と推測される。
4. 本間紀一は、牧口の旧姓である渡辺姓と、師範の卒業期を知っている。

(3) 橘文七について

次に、本間氏所持の『人生地理学』に「敬憶」と書いている橘文七について紹介する。橘は、明治27年9月20日生れ。明治45年より大正5年まで北海道師範学校に学ぶ。昭和3年、文士を志ざし上京、師範学校の先輩、田辺寿利（明治27年3月15日生れ、田辺は師範学校中退）を頼り、その関係で日本大学の図書館等でアルバイトをした。昭和7年から10年にかけて育英高校に赴任したが、昭和3年から7年までの間、戸田城聖が経営する時習学館に出入りし、牧口、戸田に度々会っている。昭和10年以降は北海道に戻り、文筆の力を買われ北海道知事の演説原稿等を作成していた。牧口は、昭和13年の北海道各地の教育講演会開催にあたり、当時道庁人事部嘱託であった橘に斡旋を依頼、橘は牧口の講演旅行にも同道した。同家には、その時の帯広、室蘭での講演会場の写真⁽²⁾が残っていた。昭和43年逝去⁽³⁾。橘文七には、北海道に関するものを中心に約20冊の著書がある。

(4) 牧口と本間との出会いに時期についての推論

残された資料と本間の証言だけでは、牧口と出会いの時期と二人の関係は判然としない。そこで、まず、牧口と本間の生涯を年代区分して推論する。

牧口常三郎新資料紹介（1）

区分名	期 間	牧口常三郎	本間紀一
A	明治21年 ～34年	札幌在住 明治34年5月上京 (17歳～)	札幌で出生（0歳～）
B	明治34年 ～大正7年	東京在住 明治39年8月札幌、小樽に来道 大正4年8月松山、瀬棚に来道 大正6年8月空知に来道 (30歳～)	札幌在住（13歳～）
C	大正7年 ～大正15年	東京在住 (北海道に行った記録なし) (47歳～)	樺太に移住（30歳～）
D	大正15年 ～昭和2年	東京在住 (北海道に行った記録なし) (55歳～)	札幌に戻る（38歳～）
E	昭和2年 ～昭和15年	東京在住 昭和6年7月末～8月札幌 昭和7年8月富良野、上川、十勝方面 昭和13年6月の野付牛、札幌等 (56歳～)	単身赴任で野付牛へ (39歳～)
F	昭和15年 ～昭和19年	東京在住 (北海道に行った記録なし) 昭和18年6月本間宛葉書を出す 昭和19年死去 (69歳～)	札幌に戻る（52歳～） 昭和20年定年退職

第一に、本間が、牧口が「大切な友人である」と発言していることに注目したい。牧口の札幌師範学校に在学在職中（A）に会っていたと仮定すると、本間は、明治34年でも13歳である。本間が仮に附属小学校の児童で、牧口が教師であったら、年をとっても牧口を「友人」とはいわないだろう。新潟出身、小樽在住の縁で両親が牧口と親交があったとしても、親の友人に友人とはいわない。よって、Aではない。

第二に、葉書の中の「アカシアの花咲きし札幌の■■■往年の回想無量の感激に御座候。」に注目したい。既に季語として「鮮緑遍身」と述べたあと、「咲きし」と過去形で書いている。本間と札幌で会ったのが、アカシアの季節である6月であることを示しているのではないだろうか。「往年の回想無量の感激に御座候」と述べていることから、よほど深い共通の思い出があるのであろう。

明治34年に上京後の牧口の北海道訪問は、判明している限りでは、小学校の校長退職した後、昭和13年を除き、いずれも7月下旬から8月である。アカシアの季節である6月ではない。アカシアの季節に北海道に行ったのは、昭和13年6月だけである。この時は、札幌、帯広、根室、網走、野付牛、室蘭を教育講習会等で回り、当時の本間の単身赴任先である野付牛（現北見市）でも6月14日に教育講習会を行っている。

昭和13年6月と考えると、いくつか符合してることがある。

第一に、この時、2週間に亘る講演会の手配し、同行したのは、道庁秘書課に勤めている橘文七であること。

第二に、本間が所持していた、『人生地理学』の購入日を押印したと思われる昭和13年8月22日のスタンプ印の時期は、牧口と会ったすぐ後になること。

第三に、本間は、昭和31年10月の新聞に掲載された『価値論』の広告を貼付し、昭和33年6

月28日に序文の一節を書き写しているが、牧口は、昭和13年6月19日に「文化生活指導原理としての価値論」と題する座談会を時計台で行っている。それ以前の来道では、郷土教育等の講演を行っており、講演の中で価値論の話をしていないと思われる。

参考までに、当時の新聞記事から明らかになっている昭和13年6月の牧口の北海道での行動を記載する⁽⁴⁾。

6月7日 講演などを行うため、戸田ともに北海道に赴く

<7日>札幌着

<8日>札幌を発ち、帯広に向う

<9日>帯広市教育会による招聘で教育講演会（帯広商工奨励館、現・帯広商工会議所）に出席し、「創価教育について」と題し講演

<10日>教育講習会（釧路・日進小学校）に出席し、「時局と教育」と題し講演

<12日>根室の教育講習会に出席し、講演

<13日>網走の教育講習会に出席し、講演

<14日>野付牛の教育講習会に出席し、講演

<16日>札幌の教育講習会に出席し、講演

<17日>創価教育学会主催、札幌市並びに北海タイムス後援による講演会（時計台）に出席。「防共対策の原理」と題し講演

<18日>室蘭市の室蘭女子小学校で「知信の科学と信仰の科学」のテーマで講演

<19日>「文化生活指導原理としての価値論」と題する座談会（時計台）に出席。質問並びに創価教育に関する疑義に答える

しかし、なぜ、本間が、牧口の旧姓渡辺を知り、師範の卒業期を正確に知っていたのかという疑問に残る。これについては、(1) 師範学校の卒業生であり、牧口と東京で度々会っていた橋から聞いた、(2) 北師同窓会発行の『昭和27年11月現在 同窓会名簿』以降には、それまでの名簿と異なり、「(旧渡辺) 牧口常三郎」と旧姓が入っているの、同窓会名簿等を見た、(3) 牧口と会ったときに、本間の母が小樽生れで、牧口も少年時代を小樽で過していること、また、本間の祖父が新潟生れであることから、牧口が少年時代のことを話した可能性が考えられる。本間は、『人生地理学』の見返に、わざわざ、明治33年の『北海道教育雑誌』掲載の牧口の写真を貼付している。

(5) 牧口は本間に何を伝えたかったか

「老生最近の状態は別冊にて御察し被下候ハバ」とあり、この葉書と前後して、牧口は、何か「別冊」を送っている。その頃、創価教育学会が発行した小冊子に『大善生活実証録（第五回総会報告）⁽⁵⁾』がある。これを送ったのであろうか。

未曾有の国難に直面している中で、「国家も家庭も一身も生命の御恵を得んとするに表る外は無之。(中略) 心の安住、生活力の源泉にあこがれる事は御同様と存し候」と力ある信仰の必要性を述べ、別冊を読んで牧口が何を考えているか知ってもらいたいと述べている。更に、現状に対して黙ってはいけぬ。その為にもどうか（日蓮仏法について）良く考えていただきたいと述べている。

昭和13年に、牧口と本間が会った時にも、価値論から大善生活、信仰の話まで突っ込んだ議論をしたのであろう。本間が、キリスト教徒であることは勿論牧口は知っている。牧口は、丁

寧な言葉を使いながらも、自らの知人一人ひとりに語りかけているのである。

（6）本間紀一の牧口常三郎に対する敬慕

本間は、牧口の投獄・獄死をいつどのようにして知ったのであろうか。昭和31年10月に北海道新聞に掲載された『価値論』の広告⁽⁶⁾を見て、牧口常三郎の名前を発見したのではないだろうか。その後、『価値論』を手にとり、戸田城聖の「補訂再版の序」から、昭和18年11月18日に牧口が逝去していたことを知る。おそらく、橋にも伝え（既に知っていたかもしれないが）、二人で追悼の談を交わしたのが、橋文七が「敬憶 牧口先生」と書いた昭和32年2月であろう。また、牧口と出会ってから20年後と推定される昭和33年6月28日には、本間紀一は戸田の『価値論』の序の一節を書き写している。

『人生地理学』は、本間によって、一旦、宮の森小学校に寄贈されるが、牧口への敬慕の思いが込められたこの本は、昭和41年2月、同校から戻ってくる。その時も、「私ノ牧口常三郎先生ヲ「尊敬スル御著書」ノ故を以テ之レヲ拝受ス 為念書キ置キマス。」と書いている。同年5月に近所の広川氏が訪問した際に、「大切な友人です。なにかをなされる方であると思っていました」として、まず、葉書を託し、次に、座談会で牧口の話聞いたことを機に、翌日すぐに『人生地理学』の本を浅香氏に託したのも、本間が牧口を深く尊敬していたからであろう⁽⁷⁾。

（1）本間紀一次男、本間寛氏の話および同氏所蔵資料による。

（2）昭和13年6月9日の帯広商工奨励館に於ける写真、同6月18日の室蘭女子小学校に於ける写真。

（3）橋文七子息、英一氏の話による。

（4）『年譜牧口常三郎 戸田城聖』（第三文明社、平成5年）による。

（5）昭和17年11月22日に行われた第五回総会報告を同年12月31日に出版。

（6）北海道新聞昭和31年10月10日付1面に価値論の広告が出ている。

（7）牧口が多くの後輩から慕われたことを示す文献は多数あるが、一例として、『北師』第2号（北師同窓会、昭和33年）123頁に「僕が東京に居を移す時、脳裏に浮んだことは多々あったが、その中で大先輩である恩師（母校で地理の先生で舎監をも兼任）である牧口常三郎先生にお目にかかること、先輩の岩清水直次郎兄に再会することであった。（略）〈明治39年卒・宮川武彦〉」とある。

（塩原将行）

3. 鈴木重敏宛葉書

(表面)

「市外大井町四〇五〇番地
小平氏内鈴木由之助殿方
鈴木重敏様

市外高田町大原一六四八
牧口常三郎

消印日付判読不能 』

(裏面)

「拝啓 先日は態々御来臨
の處失礼仕候 さて其節は
義務年限尚ほ未だ七年の積にて
申上候處 熟考すれば最早
近来は五年に相成居るやに考へられて
果して然らば転任も差程六ヶ敷かる
まじく存候間 御在京中尚ほ奔走され
ては如何 小生も奔走可仕候間 履歴書一
御廻し置被下度候 早々 』

(翻刻 開沼正、金原明彦、加藤春海)

解 説

鈴木重敏は、大正4年3月に北海道札幌師範学校を卒業している⁽¹⁾。鈴木は、自身の履歴を「母校札幌師範を出てから六十年、八十路に近い年となつてしまつたが、人生転た夢の如しです。『五十年の歩み』でも述べましたが、教職義務七ヶ年を過ぎるや、教育界から医道に転向、昭和四年から同三十九年まで、虻田町で歯科医業を続けて来たが、」と書いている。

葉書の消印の判読が出来ないため、葉書の書かれた時期を正確に特定することは出来ない。しかし、

- (1) 葉書は、「分銅はがき(銘あり)」と呼ばれる明治44年10月20日から、大正12年、関東大震災によって、発行が中断された時まで発行されていた形式のものである⁽³⁾。
- (2) 差出人の牧口の住所が「市外高田町大原1648」とあることから、『教授の統合中心としての郷土科研究』を出版した明治45年以降である。また、三笠小学校在職中の大正9年6月頃から大正11年4月までは、同校の校長宿舎にいた⁽⁴⁾と思われるのでその時期ではない。
- (3) 「義務年限尚ほ未だ七年の積にて申上候處 熟考すれば最早近来は五年に相成居るやに考へられて」との文面から、師範学校を大正4年に卒業して北海道で教職に就いて⁽⁵⁾、5年前後の大正9年頃と推測される。
- (4) 鈴木が小学校訓導在職中のことであり東京の牧口を訪問できる時期は限定される。

以上から、現時点では、大正8年頃から、9年前半頃の葉書としておきたい。

当時の牧口について、大正10年12月発行の北師同窓会会報の「会員の近況」欄⁽⁶⁾には、

○牧口常三郎君 大東京市に於ける教育者として將又地理學者としての權威たる君を吾人の先輩に持つを光榮としなければならぬ。現今本所區三笠小學校長、北師の同窓で上京する者は一度は屹度訪問する、それには深い譯がある。今日市の内外で教職に就いてゐる同窓の大部分は直接間接君の盡力に依つてゐるといふ事なので同窓からは勿論市の教育者間から非常に尊敬を拂はれている。

という記事がある。鈴木もまたそうした一人であつたのであろう。

- (1) 『北海道札幌師範学校五十年史』（北海道札幌師範学校、昭和11年）116頁
- (2) 『六十年記念誌』（札幌師範学校大正四年同期会、昭和48年）34頁
- (3) 前掲『日本切手百科事典』328頁
- (4) 渡辺力『『郷土科研究』再刊のころ』（牧口常三郎全集「月報1」、第三文明社、昭和56年）6頁
- (5) 鈴木重敏は、大正4年3月に卒業して古宇郡神恵内尋常高等小学校に配属になっている。（『北海之教育』267号、大正4年4月、76頁）
- (6) 『会報』第13号（北師同窓会、大正12年12月）4－5頁

(塩原将行)